

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K21577

研究課題名(和文)心の理論における日中韓豪比較と各文化に即した心の理論尺度作成の試み

研究課題名(英文)A cross-cultural comparison of Japan, China, Korea and Australia in theory of mind and attempts to create a scale in harmony with each cultures

研究代表者

東山 薫 (Toyama, Kaoru)

龍谷大学・経済学部・講師

研究者番号：40563763

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本、中国、韓国、オーストラリアの学生に対して、多面的な他者の心を推論する課題を実施し、文化差を探ることを目的としていたが、中国と韓国における現地調査において、一部データがとれないというトラブルが生じたため、完了年度までにすべてのデータを取り終えることができなかった。しかし、ToM課題成績においては日本成人とオーストラリア成人では統計的に有意な差が認められ、その差は行為者(主語)の使用や心的状態語の使用量の差から説明できる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to conduct university students in Japan, China, South Korea and Australia to infer the multiple theory of mind scale and to find out the cultural differences. In the field survey in China and Korea, however, due to the trouble that some data cannot be taken, it was not possible to finish all the data by year of the completion. There are significant difference between Japanese and Australian adults in theory of mind performance. The difference can be explained from the difference in usage of agents (subjects) and mental state word usage.

研究分野：発達科学

キーワード：心の理論 文化差 成人 相互独立/相互協調的自己観 共感性 心的因果/物的因果

1. 研究開始当初の背景

「心の理論(theory of mind:以下 ToM)」とは、「人は個別の心を持っており、その心によって人の行動は制御されていることや、心が構成する欲求や信念、思考、好みなどから、その人の行動を推論するべきだということについて理解し、それらの一貫した知識に基づいて人の心を推論する能力を有すること」である。

ToM 研究は、主に幼児を対象として他者の誤信(勘違い)について理解できるかを測定する誤信念課題を用いて論じられてきた。誤信念課題とは、ある事象を見た人(物語を聞いた調査協力児)がそれを見ていない人(物語の登場人物)の立場に立って回答できるかを測定する課題であり、何歳頃からこの理解が可能になるのかということがしきりに論じられてきた。誤信念課題の通過年齢に関してはメタ分析が行われるほど膨大なデータが揃い、その通過の年齢については文化差があることが指摘された。最もデータ数の多い欧米を基準とすると韓国の子どもは同じくらいの年齢で通過し、オーストラリアやカナダの子どもはそれより早く、そして、日本やオーストラリアの子どもは最も通過が遅れることが明らかになった(Wellman, Cross, & Watson, 2001)。

その後、誤信念課題で測定されるような他者の「誤信」だけではなく、他者の「欲求」や「感情」などの理解も重要であると指摘されるようになり、心の多面的な理解を測定する課題が考案された(Wellman & Liu, 2004)。Wellman らは欧米の 3~6 歳の幼児にその課題を実施し、欲求、信念、知識、誤信、表情に出さない感情の理解の順番で発達が進むことを明らかにした。日本でもその欧米の研究とできるだけ同じ条件になるように調査協力児の年齢や課題の日本語訳に配慮した調査が行われ、発達の順番は欧米と同様であったものの、通過率は 5~20%も低いことが明らかになった(東山,2007)。すなわち、誤信念課題で指摘されていた課題の通過の遅れが、心の多面的な理解を測定する課題においても見られたのである。

この ToM の発達の遅れについては Markus & Kitayama(1991)の個人主義 vs. 集団主義(以下 I/C)理論がよく引用される。西洋は個人主義であり自他分離の文化で育つため、誤信念課題のように「自分は物の移動を見て知っているが、他者は見ていなかったのを知らない」というような自分とは異なる心を持つ他者の心の理解についても早い段階から正答できると考えられる。一方、東洋は集団主義なので例えば友達をぶった子どもに対して「あなたがぶたれたらどんな気持ちになる? お友達も同じ気持ちだと思うよ」などと、自分の心を基準にして他者の心を推論するような働きかけを周りの大人から多く受ける。従って自他の視点の分離がされず、誤信念課題のような自他の心が異なる課題にお

いて、他者の心に関する理解が遅れるというのである。

しかし、同じ東洋でも日本の子どもと比較して韓国の子どもは誤信念課題を通過できる年齢がかなり小さく欧米と同程度である(Wellman, et al.,2001)。また、多面的な心の理解を測定する課題においては、日本と欧米は同じ順序(欲求、信念、知識、誤信念、表情に出さない感情)で理解が進むが、中国の幼児は知識よりも信念の理解が早い(Wellman, et al.,2006)。すなわち、同じ東アジア圏でも日本と韓国や中国では ToM の発達に差があり、I/C 理論では説明がつかないのである。また、I/C がどのように ToM と関わっているかについての実証研究もない。

さらに、子どもの ToM の発達には母親の言語使用が密接に関わっていることが明らかになっている(e.g.,Peterson & Slaughter,2003; Slaughter,et al.,2003)。日本においても(1)母親が子ども自身や他者の心について考えさせるような言語を用いるほど、また(2)母親が子どもにとってわかりやすい言語の使い方をするほど、子どもの ToM 課題の成績が良いことがわかっている(東山,2011)。Naito & Koyama(2006)は日本語は心的状態語を明確には表現しないために ToM の発達が遅れると指摘したが、行為者(主語)不在と指摘されることも多い(小林,2005)。すなわち、日本語は心的状態語や主語が明確に表現されないために、周囲の大人が誰についてのどのような心的状態を説明しているかが子どもにはわかりづらく、他者の心的状態に関する理解を必要とする ToM の発達が遅れるという可能性が考えられる。文化とは、「ヒトの生活を媒介する人工物の集合で、多くは世代を超えて共有されるもの」(波多野・高橋,2004)とあるように、大人から子どもへと伝えられ共有されていくものである。しかし、先行研究ではそれぞれの文化内で母親の心的状態語の使用量を見ている研究はあっても(e.g.,Dunn, et al.,1991;園田,1999)、同じ状況下で異なる文化の人々がどのような言語使用をするのかについて見ている実証研究はない。

2. 研究の目的

そこで本研究では、次の2点について検討することを目的とした。

(1)同じ東アジア圏の国でありながら ToM の発達が異なる日本・韓国・中国、さらには同じ英語圏でありながら欧米よりも ToM の発達が早いオーストラリアの成人を対象に心の多面的な理解を測定する課題を実施し、他者の心を推論する際にどのような言語表現がなされているのかを検討し、I/C との関連も含めて文化差の原因を探ること。

(2)日本・韓国・中国・オーストラリアにおいて「人の心を推論する上で重視されること」を調査し、4 か国で重要視された文化普遍・固有の内容を併せた尺度を作成して各国で

実施し、ToM と関連すると考えられている様々な能力との関連を検討すること。

3. 研究の方法

以下の5種の課題をそれぞれの言語で質問紙にして実施した。日本、中国、韓国の大学生には質問紙もしくはwebで回答できる形式を用い、オーストラリアの大学生には質問紙で回答を求めた。

(1) 調査対象者

日本、韓国、中国、オーストラリアの大学生各100名を対象とした。

(2) 調査内容

以下の5種の課題をそれぞれの言語で質問紙にして実施した。日本、中国、韓国の大学生には質問紙もしくはwebで回答できる形式を用い、オーストラリアの大学生には質問紙で回答を求めた。

ToM 課題(東山, 2007; Wellman & Liu, 2004)

「欲求 (Diverse Desires)」、「信念 (Diverse Beliefs)」、「知識 (Knowledge Access)」、「予期せぬ中身タイプの誤信念課題 (Contents False Belief)」、「明示的誤信念課題 (Explicit False Belief)」、「信念と感情の関連 (Belief Emotion)」、「表情に出さない感情 (Hidden Emotion)」の理解からなる7課題を実施した。ターゲット質問は表情に出さない感情の理解課題で2問、他の6課題は1問ずつ計8問であるため合計点8点満点、記憶質問も含めると合計14点満点となった。また、回答にいたった理由についても尋ねた。これは「行為者(主語)の有無」や「心的状態語」の使用について見るためである。

相互独立・相互協調的自己観尺度(木内, 1995)

「A.自分の意見を主張する」、「B.まわりの人の意見に合わせる」というように「独立的自己理解に基づく行動(A)」と「相互依存的自己理解に基づく行動(B)」を対にし、「Aにぴったりとあてはまる」、「どちらかといえばA」、「どちらかといえばB」、「Bにぴったりとあてはまる」の4件法で尋ねた。合計点は64点満点であり、得点が高いほど集団主義の傾向が強いことを表す。

情動的共感性尺度(加藤・高木, 1980)

「私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる」、「私は人がうれしくて泣くのを見ると、しらけた気持ちになる(逆転項目)」など、25項目に対して「全くそうだと思う」から「全く違うと思う」の7件法で尋ねた。合計点は175点満点となり、得点が高いほど共感性が高いことを表す。

Interpersonal Reactivity Index (以下 IRI) (David, 1983; 桜井, 1988)

「共感の認知的側面」と「共感の情動的側面」の尺度からなる。さらに、共感の認知的側面は視点取得尺度からなり、共感の情動的側面は共感的配慮尺度・空想尺度・個人的苦惱尺

度からなる。視点取得尺度とは「何かを決定する時には、自分と反対の意見の人の立場に立って考える」などの項目を含み、共感的配慮尺度は「自分よりも不幸な人々には優しくしてあげたいと思う」、空想尺度は「劇や映画を見ると、自分が登場人物のひとりになったように感じる」、個人的苦惱尺度は「緊張状態になるとひどくびくびくする」などの項目からなる。各尺度7項目ずつあり、4件法で尋ねた。合計点は112点で、得点が高いほど共感性が高いことを表す。

EQ(心的因果)SQ(物的因果)(Baron-Cohen, 2002)

EQ(心的因果)は「誰かが会話に加わりたいているときは、すぐに気がつく」や「誰かが何かを言っても、それが言葉とは別の意味であるときには、すぐにわかる」などのように人の心に対する関心を問う項目からなる。SQ(物的因果)は「もし車を買う場合には、車のエンジンの性能について詳細な情報を知りたい」や「機械がどのように動くのかというメカニズムなどに強い興味を感じる」などのように物に対する関心を問う項目からなる。EQ, SQ それぞれに関する質問40項目とダミー質問20項目の計100項目に関して4件法で尋ねた。EQは160点満点、SQも160点満点で、得点が高いほど、その傾向が強いことを示す

4. 研究成果

本研究は、日本、中国、韓国、オーストラリアの学生に対して、多面的な他者の心を推論する課題を実施し、文化差を探ることを目的としていたが、中国と韓国における現地調査において、一部データがとれないというトラブルが生じたため、完了年度までにすべてのデータを取り終えることができなかった。中国と韓国のデータは現在も引き続きデータをとり続けており、収集でき次第分析を開始する。これにより、各文化に即した尺度作成の試みにも支障が出た。したがって、以下は日本とオーストラリアの結果のみ報告をする。

(1) 行為者(主語)の有無

ToM 課題(東山, 2007; Wellman & Liu, 2004)の回答にいたった理由において、行為者(主語)は登場人物の名前、もしくは代名詞が出てきた場合「1」とカウントした。該当する単語が複数回出てきても「1」とした。主語の有無の内訳を示したものが表1である。日本とオーストラリア成人における主語の有無の差について χ^2 検定によって比較を行った。その結果、7課題すべてにおいてオーストラリア成人の方が主語を多く用いていることがわかった(欲求: $\chi^2(1)=74.22, p<.001$, 信念: $\chi^2(1)=86.22, p<.001$, 知識: $\chi^2(1)=53.68, p<.001$, 予期せぬ中身タイプの誤信念課題: $\chi^2(1)=33.59, p<.001$, 明示的誤信念課題: $\chi^2(1)=99.61, p<.001$, 信念と感情の関連:

$\chi^2(1)=116.71, p<.001$, 表情に出さない感情:
 $\chi^2(1)=153.23, p<.001$)

表1 ToM 課題における主語の有無

	主語の 有無	日本	豪州
	DD	有	44
無		56	1
DB	有	38	99
	無	62	1
KA	有	50	96
	無	50	4
CFB	有	10	47
	無	90	53
EFB	有	26	95
	無	74	5
BE	有	3	78
	無	97	22
HE	有	1	88
	無	99	12

(人)

注) DD=欲求, DB=信念, KA=知識, CFB=予期せぬ中身タイプの誤信念課題, EFB=明示的誤信念課題, BE=信念と感情の関連, HE=表情に出さない感情

(2)心的状態語の有無

心的状態語は登場人物, すなわち行為者に関するものだけ「1」とカウントし, 複数回出てきても「1」とした。Bretherton & Beeghly (1982)の基準と日本語独特の表現については岩田(1999)や松永・斉藤・荻野(1996)の指標も加えて分類した。分類のカテゴリーは以下の通りである。

知覚(perceptual): それぞれの否定形も含む
 見る(see, look, watch), 聞く(hear, listen), 味わう/味がする(/おいしい/甘い/辛い/しょっぱい)(taste), においがする(/くさい)(smell), 感じる/感じがする(feel), 寒い/冷たい(cold), 凍える(freezing), 暑い(hot), 暖かい(warm), 怪我をする/痛い(hurt)

かゆい, 重い(岩田,1999; 松永他,1996)

生理的(physiological): それぞれの否定形も含む

お腹がすく(hungry), 飢える(starving), 喉が渇く(thirsty), 眠い(sleepy), 眠る/寝る/昼寝する(sleep), 眠っている/寝ている/ねんねしている/昼寝している(asleep), 疲れる(tired), 起きている(awake), 起きる(wake up), 病気/風邪/調子が悪い/具合が悪い(sick)

感情(emotional and affective)

a)ポジティブ(positive): それぞれの否定形の場合ネガティブとする

嬉しい/喜ぶ/幸せ(happy), 楽しい(have fun/ have a good time), おかしい/面白い(funny), いい気分(feel good), 大丈夫/平気(feel all right/ O.K.), いい/~/がいい(better/ nice), 好き(like/ love), 抱っこ(hug), 笑う/ニコニコする(laugh/ smile)

b)ネガティブ(negative): それぞれの否定形の

場合ポジティブとする

悲しい(sad), 怒る(angry), 怒る/不機嫌(mad), 怖がる(scared), 怖い(scary), 汚い(dirty), 汚い/ちらかった/だらしない(messy), まずい/不快/不潔(yucky), 気分が悪い/不愉快(feel bad), 泣く(cry)

嫌い, イヤ, やだ(岩田,1999; 松永他,1996)

認知(cognitive): それぞれの否定形も含む (ただし, 子どもの「わからない/忘れちゃった/知らない」またはそれを受けて母親が言った「わかんない/わかんない/忘れちゃった/知らない?」は含まない。「~/がわからない」など文章で用いられているものは含む)

知っている(know), 思う/考える(think), 覚えている/思い出す(remember), 忘れる(forget), かも/かもしれない(may/ may be), わかる(understand), ふりをする/ごっこ/おままごと(pretend), 夢見る/夢(dream), 実在する/本物(real), 推測する/言い当てる(guess), ~を意味する(mean)

~/かな?, ~/じゃない?, ~/かしら?(岩田, 1999; 松永他, 1996)

意志(volition): それぞれの否定形も含む
 ~欲しい(want), ~する必要がある(need), ~しなければならぬ/しなきゃいけない(have to), ~することができる/できる/れる(can), ~し難い/なかなか~/できない(hard)

~/たい, ~/して, いる, ちょうだい(岩田, 1999; 松永他, 1996)

心的状態語の有無の内訳を示したものが表2である。

表2 ToM 課題における心的状態語の有無

	心的状態 語の有無	日本	豪州
	DD	有	98
無		2	4
DB	有	95	97
	無	5	3
KA	有	11	28
	無	89	72
CFB	有	26	43
	無	74	57
EFB	有	89	95
	無	11	5
BE	有	76	74
	無	24	26
HE	有	88	84
	無	12	16

(人)

日本とオーストラリア成人における心的状態語の有無の差について χ^2 検定によって比較を行った。その結果, 双方に有意に差があったのは知識 ($\chi^2(1)=9.21, p<.01$) と予期せぬ中身タイプの誤信念課題 ($\chi^2(1)=6.40, p<.01$) であり, 有意傾向にあったのが明示的誤信念課題 ($\chi^2(1)=2.45, p<.10$) で, いずれもオーストラリア成人の心的状態語の使用が

多かった。欲求と信念、表情に出さない感情に関しては、オーストラリア成人と比べて、日本成人の心的状態語の使用が多かったが有意な差は認められなかった（欲求： $\chi^2(1)=0.68$, n.s., 信念と感情の関連： $\chi^2(1)=0.11$, n.s., 表情に出さない感情： $\chi^2(1)=0.66$, n.s.）

(3)心の理論課題と「相互独立・相互協調的自己観尺度」、「情動的共感性尺度」、「IRI」、「EQ/SQ」との関連

実施した課題それぞれの平均値と標準偏差を表3に、日本とオーストラリア成人の差を表4にそれぞれ示した。

表3 各課題の平均値と標準偏差

	日本	豪州
ToM8	7.60 (.73)	7.76 (.50)
ToM14	12.91(.99)	13.02(.75)
I vs C	44.34 (7.78)	36.63 (6.84)
共感性	99.39 (10.45)	104.31 (9.58)
IRI	94.72 (12.03)	61.94 (12.00)
EQ	34.04 (10.80)	42.79 (11.59)
SQ	20.25 (11.00)	28.84 (13.05)

注)ToM8=ターゲット質問のみの ToM 課題得点, ToM14=記憶質問も含めた ToM 課題, I vs C=相互独立・相互協調的自己観尺度, 共感性=情動的共感性尺度, IRI= Interpersonal Reactivity Index, EQ=心的因果, SQ=物的因果

表4 各課題の平均値の差

	t 値	差
ToM8	$t=2.23^{***}$	日 < 豪
ToM14	$t=1.10$	日 = 豪
I vs C	$t=69.55^{***}$	日 > 豪
共感性	$t=63.15^{***}$	日 < 豪
IRI	$t=26.37^{***}$	日 > 豪
EQ	$t=7.69^{***}$	日 < 豪
SQ	$t=7.17^{***}$	日 < 豪

ターゲット質問のみの ToM 課題得点ではオーストラリア成人の方が成績がよかったが、記憶質問も含めた ToM 課題では統計的に有意な差は認められなかった。相互独立・相互協調的自己観尺度では、従来から指摘されているように日本成人の方が相互協調的自己観（集団主義傾向）が高かった。情緒的共感性尺度はオーストラリア成人の方が高かったが、IRI では日本の方が得点が高かった。また、心的因果と物的因果に関しては両者ともオーストラリア成人の方が高得点であった。

次に、ToM 課題と各尺度間の関連を見た。日本成人においては、集団主義傾向が高いほど心の理論成績がよかった。これは従来から指摘されている個人主義の文化で育った方が ToM の成績がよいであろう（Markus & Kitayama, 1991）というものとは逆であった。また、IRI の「個人的苦悩」（援助が必要な場

面で動揺しやすい）傾向が高いほど心の理論成績がよく、SQ（物的因果）得点が高いほど心の理論成績が悪かった。オーストラリア成人に関しては、いずれの尺度とも ToM 成績は関連しなかった。

(4)大人に使用できる心の理論尺度の作成

中国と韓国において一部のデータがとれないというトラブルが生じたことにより、大人に使用できる心の理論尺度の作成は日本成人だけにしか実施できなかった。以下はその方法と結果である。

4年制大学の大学生 190 名（18 歳 9 か月～23 歳 5 か月、女性 72 名、男性 118 名）を対象とした。大多数が同意できない架空の文化における出来事を 2 種類用意した。(1) A さんは「輸血をしてはいけない国」で生まれ育ちました。ある日、自分の子どもが事故にあり、たまたま居合わせた外国のお医者さんに「輸血をすれば助かる」と言われました。しかし、A さんは輸血を拒み、子どもは亡くなってしまいました。(2) B さんは「3 人の女の子は生んではず、3 人目の女の子の妊娠がわかったら墮胎しなければいけない」という国で生まれ育ちました。B さんは結婚して 2 人の女の子を出産しました。ある日、3 人目の子どもを妊娠していることがわかり、検査をしてもらうと女の子であることがわかりました。検査をしてくれた外国人のお医者さんに「生むべきだ」と言われましたが、B さんは墮胎しました。それぞれの問いに対して 2 つの質問を用意した。(A) この A / B さんの行動に対してあなたはどのように思いますか。(B) あなたが A / B さんだったならばどのような行動をしたいと思いますか？

それぞれの質問に対して、「登場人物の文化（立場）に立った回答」に 2 点、「自他の文化（立場）で葛藤・中立（どちらでもない）・別の解決策の提示・わからない等の回答」に 1 点、「自分の文化（立場）に立った回答」に 0 点を与えた。すなわち、(A) の質問では登場人物の文化の立場に立ち、(B) の質問では自分の文化に立った場合（＝自分の文化と切り離して登場人物の立場に立った場合）に最も得点差が大きくなるように分類した。

課題の回答のパターンを「A > B」もしくは「A = B」となる 6 パターン、および「A < B」をひとまとめに「その他」とし、全部で 7 パターンの内訳を男女別に表 4 に示した。(1) の場面に関しては(A)と(B)の得点差が 2 点なのは女性で 20 名（27.8%）、男性で 22 名（18.6%）、(2)の場面に関しては女性で 7 名（9.7%）、男性で 17 名（14.4%）であった。すなわち、大学生であっても自分の立場と登場人物の立場を切り離して考えることは難しいことが確かめられた。また、相手の立場に立った回答をした人が「自分でも同じことをしたと思う」と回答する割合が 13.9%～30.6%あり、一見相手の立場に立っているよ

うに見えても、自分の身に置き換えて考えていたことがわかった。

表4 男女別の回答パターンと人数

	1-A	1-B	人数	2-A	2-B	人数
女性	0	0	21	0	0	11
	1	0	11	1	0	1
	1	1	0	1	1	6
	2	0	20	2	0	7
	2	1	7	2	1	9
	2	2	10	2	2	22
	その他 (A<B)		3	その他 (A<B)		16
男性	0	0	47	0	0	20
	1	0	9	1	0	4
	1	1	4	1	1	9
	2	0	22	2	0	17
	2	1	2	2	1	14
	2	2	24	2	2	36
	その他 (A<B)		10	その他 (A<B)		18

(5)本研究の意義と今後の課題

本研究は、ToMの文化差について実証的に検討されてこなかった問題について、同じ課題を用いて日本、中国、韓国、オーストラリアで検討しようとしたことに意義がある。残念ながら完了年度までに中国と韓国のデータが一部取り終わらなかつたが、引き続きデータをとり続けるとして、今回は日本とオーストラリアの比較を行った。ただ、幼児に使用するToM課題を用いたため、天井効果が見られたことは否めない。そのことが他の尺度との関連に影響が出たと考えられる。しかし、ターゲット質問の正答数においては日本成人とオーストラリア成人では統計的に有意な差が認められた。その差は行為者(主語)の使用や心的状態語の使用量の差から説明できる可能性が示唆された。

日本成人においてのみだったが、大多数が同意できない架空の文化における出来事に対する課題を実施した。大人であっても登場人物の立場や視点に立つことが難しく、これまでは幼児や児童でばかり問題にされてきたToMの発達について、一石を投じた。今後は、同じ課題を中国、韓国、オーストラリアでもこの課題を実施して、文化差を検討することが必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

- (1) 東山 薫・Kana IMUTA・Virginia SLAUGHTER・北崎 充晃・板倉 昭二(2016). 心の理論と個人主義 vs. 集団主義、共感性との関連：日本とオーストラリア成人による検討 電子情報通信学会技術研究報告, 116 (436), 59-63.[査読なし]

[学会発表](計4件)

- (1) Kaoru TOYAMA, Kana IMUTA, Virginia SLAUGHTER, Michiteru KITAZAKI, and Shoji ITAKURA (2017). The study on the factors of cultural differences in theory of mind: An examination of Japanese and Australian adults. International Convention of Psychological Science (ICPS) 2016. March, 2017(Wien, Austria).
- (2) 東山 薫・Kana IMUTA・Virginia SLAUGHTER・北崎 充晃・板倉 昭二(2017). 心の理論と個人主義 vs. 集団主義、共感性との関連—日本とオーストラリア成人による検討—, 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)2017年1月研究会, HCS2016-69. なみきスクウェア(福岡県福岡市).
- (3) 東山 薫・Kana IMUTA・Virginia SLAUGHTER・北崎 充晃・板倉 昭二(2016). 心の理論の文化差は“個人主義 vs. 集団主義”で説明できるか—心の理論課題と相互独立・相互協調的自己観尺度との関連—, 教育心理学会第58回総会, PD07, 73. 2017年10月, サポートホール高松・かがわ国際会議場(香川県高松市)
- (4) Kaoru TOYAMA, Kana IMUTA, Virginia SLAUGHTER, Michiteru KITAZAKI, and Shoji ITAKURA (2015). A Cross-Cultural Comparison of Mental State Understanding: An examination of Japanese and Australian adults' reasoning for their responses to theory-of-mind questionnaire. The Japanese Society for Language Sciences (JSLS) 2015 Conference Handbook, 92-93. July, 2016, Beppu International Convention Center (Oita, Japan).

[図書](計1件)

- (1)子安 増生・加藤 義信・郷式 徹・嶋田 総太郎・東山 薫・千住 淳・木下 孝司・林 創・溝川 藍・赤木 和重・小川 絢子・Serena Lecce・Federica Bianco・内藤 美加・若林 明雄・別府 哲・熊谷 高幸・藤野 博・米田 英嗣(2016). -5 「心の理論」の発達の文化差 - 日本・韓国・オーストラリアの比較から 子安増生(編) 「心の理論」から学ぶ発達の基礎 - 教育・保育・自閉症理解への道 ミネルヴァ書房

6. 研究組織

(1)研究代表者

東山 薫 (TOYAMA Kaoru)

龍谷大学・経済学部・講師

研究者番号：40563763